

される時期に、「硬派」の学生の間から「性的なもの」が脱色されると同時に、それまでは「硬派」の学生のものであった男色が「軟派」の学生の特質となったということであるが、学生は、全体として「硬派」の学生のスケープゴートとしてどのような存在に矮小化されたのか、その内実と含意をより詳しく知りたかった。

本書で示された論点は非常に広く、描ききれない部分も多かったようだが、著者は本書では概観するのみであった戦後の動向を対象に、さらに詳細な歴史的検証を行うとのことなので、今後のさらなる研究の進展を期待したい。

註

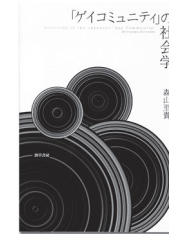
- ▶1—人類学的研究によると、「母系制 (matrilineal)」の社会は少なからず存在するが、「母権制 (matriarchy)」の社会は実証的に発見されていないとされている。「家長制」の概念については、瀬地山 (1996) に詳しい。
- ▶2—日本における「恋愛」の意味とその歴史については、佐伯 (1998;2008) などに詳しい。

参考文献

- 佐伯順子. 1998. 『色と愛の比較文化史』岩波書店.
 ————. 2008. 『愛と性の文化史』角川学芸出版.
 瀬地山角. 1996. 『東アジアの家長制——ジェンダーの比較社会学』勁草書房.
 Sedgwick, Eve K. 1985. *Between men: English literature and male homosexual desire*. New York: Columbia University Press. = 2001. 上原早苗・亀澤美由紀 (訳) 『男同士
 の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.

森山至貴 (著)

『「ゲイコミュニティ」の社会学』(勁草書房、2012年)



新ヶ江章友

はじめに

2012 (平成24) 年に勁草書房より出版された森山至貴による単著『「ゲイコミュニティ」の社会学』は、日本における男性同性愛をめぐる研究に一石を投じた重要な研究である。本書は、日本の男性同性愛について研究する者が共有する価値のある問いを投げかけている。森山が本書のなかで問う核となる問いとは、以下のようなものである。

ゲイ男性にとってより肯定的なニュアンスをもつ「ゲイコミュニティ」という語が用いられるようになった、というこの大まかな経緯に着目するかぎり、話はここで幸福にも終わることとなる。しかし、本書の記述はむしろこの地点からスタートする。すなわち、「ゲイコミュニティ」という語で指し示されるリアリティに特有の困難がむしろ存在するのではないか、その困難について語られるべきではないかという疑問こそ、本書の記述を推進させるものがある。「ゲイコミュニティ」に対する敬意をもった懐疑が、本書の出発点である。

(森山 2012, ii)

森山はこれまで、様々な学術雑誌に生産的に論文を発表してきた。だが評者は、それらの論文それぞれのつながりや関係について、よく理解できていない部分があった。今回それらの論文を一冊の単著としてまとめ上げたのが本書であるが、その際にキーワードとなっているのが、本のタイトルともなっている「ゲイコミュニティ」である。本書の出版によって森山がこれまで温めてきた問いが明確に立ち上がってきたわけであるが、森山の問題関心は評者自身の問題関心とも一致していたのだと、本書を読んで気がついた。森山は、この「ゲイコミュニティ」への「ついていけなさ」がなぜ生じるのかを一つの「問い」として練り上げていくことで、独創的な「解」を見つけ出そうとしていく。森山は、「集合性と心理的距離やそれへの疎外感、言い換えるならば集合性への「ついていけなさ」こそ本書の考察の中心である」と述べている(森山 2012, 7)。

しかしながら、各章における論の展開を追いかけると、森山と評者の間の差異も次第に明確に立ち上がってきた。そして評者自身、森山の問いをさらに練り上げることによって、評者自らの問いに対する解を導き出す必要があることにも気づくこととなった。森山の問いの立て方とその問いに対する解の導き方を丁寧に追いつながりながら、本書評を、評者との差異を明らかにするひとつの試みとして位置づけたいと思う。

ここでまず、『「ゲイコミュニティ」の社会学』の目次を紹介したい。

序章	もうひとつの「生きづらさ」を社会学する
第I部	つながりの編成
第一章	ゲイ男性のつながりを「歴史化」する
第二章	二種類のつながり
第三章	ゲイコミュニティという思想
第II部	つながりの隘路
第四章	つながりの禁欲化——カミングアウト論の分析から
第五章	ライフスタイルという問題——雑誌『Badi』の分析から
第III部	つながりの技法
第六章	立ち上がる〈わたしたち〉
第七章	技法としての「性的差異」
終章	〈わたしたち〉でいることの困難と技法

以上のように、本書は三部構成となっており、序章と第一章のみが書き下ろしで、それ以外の章は既発表論文をもとに大幅に加筆修正されている(巻末の初出一覧を参照)。

本書の構成自体は明快である。まず第I部では、本書で解くべき問いを設定しようとする。森山は、「第I部では、本書にとっての課題であるゲイ男性・バイセクシュアル男性の「ついていけなさ」をその生起の構図の側から描き出していくための準備を行う」と述べている(森山 2012, 20)。

第II部と第III部では、第I部で立てた問いをもとに、この「ついていけなさ」について具体的にどのような事例から示すことができるのかを分析していると言える。具体的事例を示すために使用している一次資料としては、「ゲイ男性・バイセクシュアル男性の集合性に関する記述のある学術論文、一般の書籍、ゲイ雑誌、筆者自身が行ったインタビューの記録、補足的資料としてインターネット上のホームページなど」である(森山 2012, 20)。第II部では、「ついていけなさ」という問題が具体的にどのような事例によって示されるのかを、カミングアウトとライフスタイルという問題から示そうとする。そして第II部を踏まえた上で、第III部では、「ついていけなさい」という難問を解くにあたり、実際にゲイ男性・バイセクシュアル男性がどのようにして策を講じているのかを、彼らが使用する「こっちの世界」とタチ/ネコという用語法に着目することにより分析しようとしている。

本来書評では、すべての章についての言及が必要となるのかもしれない。しかし評者が着目したいのは、第I部で提示した問いの立て方にそもそも問題があるのならば、第II部と第III部の議論へとつなげていくことに無理があるのではないかということである。このような点から、本書評は主に第I部の論理展開に着目することで、本書全体の構成そのものについての問題提起を行うものである。

1 | 問いとしての「二種類のつながり」について

まず第I部で、森山は日本のゲイ男性の「ついていけなさ」が生起する地点を、歴史的に追っていかうとする。第一章で森山は、「ゲイ男性のつながりが論理的には大別して特権的な他者とのつながりと、総体的なつながりの

二種類に分類できること、またこの二つのつながりは不可分の状態から明確に分離できる状態へと歴史的に変化している」ことを指し示そうとしている(森山 2012, 20)。第一章は、本書を方向づける問いを提示しようとしている点で、重要な位置づけにある。だが逆に言うと、ここでの問いの立て方そのものが最終的な解のありようを方向づけることとなる。したがって読者にとって、第一章で森山が問うていることを丁寧に追うことは、本書の論の展開を理解する上でも重要な作業となる。

評者は、森山の問いそのもの——「二つのつながりの間に、適切な関係性を設定するという問いが解けないゆえに「ついていけなさ」が発生している、との仮説」(森山 2012, 79)——に対する違和感をもったということ、まずは告白しておきたい。とりわけ第一章は、これまで論文として発表されていない書き下ろしであり(巻末の初出一覧を参照)、したがってこの第一章において、これまで発表されてきた論文を一本の糸として論理的につなごうとする意図が伺える。この一本の糸こそが、森山の言う「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」という「二種類のつながりの関係性」であり、それへの「ついていけなさ」である(森山 2012, 30)。

評者は、森山の問いそのものが、これまで自分が書いてきた論文を整理しつなげようとするあまり、無理に後付けて練り上げられたのではないかという印象を受けてしまった。本書の問いそのものについては、1920年代に相当する大正・昭和初期の書物等(あるいはインタビューも可能かもしれない)を用いた歴史社会学的な言説分析を、さらに丁寧にを行う必要があるのではないだろうか。要するに、森山の本書の問いそのものを裏付ける資料的根拠が乏しいのである。例えば1920年代には、同性愛者同士の同人誌が存在したのか、もし存在するのなら、そこでどのようなことが述べられているのか。このような分析を通してはじめて、森山が言うところの「総体的なつながり」とは何なのかを示すことができるのではないだろうか。たしかにこのあたりの歴史社会学的分析は日本の同性愛研究においては手薄であると言えるが、近年前川直哉が『男の絆』の中で一部分分析を行っている。今後、このような実証研究が待たれるところである。そもそも、この「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」という二つの概念がどのような経緯で本書に登場しているのかを森山は具体的には示しておらず、唐突に登場する感が否めない。先に述べた通り、森山はこれまで書いた論文を一本の糸でつ

なごうとする際、ルーマンのコミュニケーションとしての愛をめぐる議論に登場してくる「全体社会」と「圏」という概念を参照点としようとするあまり、この「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」という「二種類のつながり」を同性愛の文脈に後付け的に導入したのではないだろうか¹。

ここで再び、森山が「二種類のつながり」の問いをどのようにして立てていったのかを振り返って整理してみたい。本書では「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」という「二種類のつながり」が発生する起源を、「同性愛者の性的アイデンティティの誕生」、つまり「悩める同性愛者」の誕生に見出している(森山 2012, 33-37)。

特権的な他者とのつながりは、「悩める同性愛者」の誕生によって相手が同性愛者＝同じ悩みをもつ者であるかを先回りして斟酌する形に変容し、このつながりを可能にすると同時に同性愛者としての悩みを共有するという二つの意義をもった総体的なつながりは、まさに「悩み」が発生したこの時点で立ち上がったのである。(森山 2012, 39)

「総体的なつながり」が発生する地点として森山が重視している点は、同性愛者という「アイデンティティの誕生」にあった。そしてこの時点、先行研究に鑑み「一九二〇年代ごろ」だと想定している(森山 2012, 30)。「同性愛という性的アイデンティティを内面化した同性愛者の誕生は、「悩み」の共有という回路を通じて、彼らが男性を欲望するのではなく男性同性愛者を欲望する、という事態を生み出した」のだと言う(森山 2012, 37)²。つまり、「悩み」を通して男性同性愛者が「総体的なつながり」として集団化していったということである。森山の言う「総体的なつながり」とは、「ゲイアイデンティティを要件とした男性同性愛者の集団」であり、森山はこの「総体的なつながり」こそを「特権的な他者とのつながりを可能にする条件」として位置づけている(森山 2012, 40)³。

では実際に、1920年代に登場した「総体的なつながり」の具体的様式とは、どのようなものだったのだろうか。そして「総体的なつながり」が1920年代以降に存在したとするならば、それが本当に「特権的な他者とのつながり」を形成していく資源となりえたのだろうか⁴。「二種類のつながり」をめぐる問いが本書の最も根幹に関わるものであるからには、少なくともこの点に

については明らかにする必要がある。本書では、『変態性欲』などの投稿欄（とりわけ短歌）に基づきこの点を証明しようとしてはいるが、ここで引用されている投稿欄だけでは、以上の主張を説得的に行うにはやはり論拠が乏しすぎる。森山の主張は、何らかの新たな歴史的資料が提示されることによって、論が補強されるかもしれない一方、逆に言うとそれらの資料によって森山の論そのものが覆される可能性も十分にあり得るということである。

2 「圏」のゼマンティックをめぐる問いについて

この「二種類のつながり」が具体的にどのようなものなのかを提示し得ていない点は、後の論の展開を脆弱なものにしてしまっていると評者は考える。

仮に森山が第一章で述べるように、「特権的な他者とのつながり」と「総体的なつながり」の「二種類のつながり」の関係が1920年代に発生したと想定してみよう。その上で、「本書が採用すべきは、二種類のつながり間の関係性に、ゲイ男性のつながりの解くべき問いを見出す」という森山の主張に耳を傾けてみることにしよう（森山 2012, 55）。森山はここで、「二つのつながりの間に、適切な関係性を設定するという問いが解けないゆえに「ついていけなさ」が発生している」という仮説を提起する（森山 2012, 79）。この二つのつながりの適切な関係性を、森山は「圏」のゼマンティックと呼んでいる⁵。森山は、この「圏」のゼマンティックは現在男性同性愛の関係においてうまく機能していないし、その成立もはや望めないと言う⁶。それゆえ現在、ゲイ男性における「特権的な他者とのつながり」も不安定なままだということになる⁷。

このように、森山はゲイ男性における「特権的な他者とのつながり」がうまく機能しない原因を、同性婚などの制度の有無にではなく、あえて現代社会において「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」の間に「圏」のゼマンティックが成立しえないことに見ようとするが、この論理展開も非常に分かり辛いと言わざるを得ない。

この分かり辛さの原因は、森山が同性愛と異性愛をきれいに分離して分析してしまったことにあるのではないかと評者は考える（森山 2012, 73）。つまり、同性愛の「二種類のつながり」をまるで異性愛と独立したものとして描いているからではないか⁸。次に示す図1は、評者が森山の論に基づいて図式化

図1 異性愛と同性愛の関係



したものである⁹。

森山のゲイ男性の「圏」のゼマンティックをめぐる議論において、「総体的なつながり」が「特権的な他者とのつながり」をあたかも保証すべきもののような描かれ方になっている（森山 2012, 78-79）。森山の「圏」のゼマンティックの議論はルーマンの愛をめぐるコミュニケーションの議論に拠るが、ルーマンの「全体社会」と「圏」をめぐる議論そのものは、コミュニケーションとしての愛を「全体社会」の中にどのように位置づけるのかに重心が置かれているように見える。しかし森山は、ルーマンの愛の議論を同性愛の議論に流用し（あるいは、横目に見ながら）、異性愛における「全体社会」と「圏」を、同性愛における「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」のように相似形として分析したため、話を自ら複雑にしてしまっているように見える。

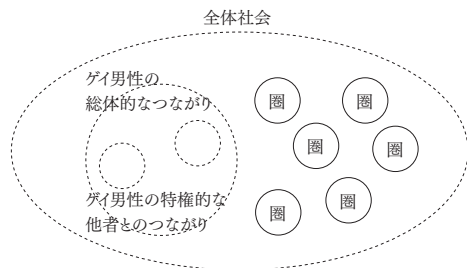
森山は、「ゲイ男性の場合には異性愛の場合と異なり、このパラドックス（=自発的な服従というパラドックス、評者註）を解くためのもっとも基底的な前提条件が「自然に」成立しているわけではないため、結果として、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりの関係性を自覚的に設定しなければなら」と述べているが（森山 2012, 56）、少なくとも評者には、ゲイ男性自身が「二種類のつながり」を自覚的に意識して設定しているようには思えない¹⁰。この点についても、どのような資料的根拠からそのようなことが言えるのかを示すべきではないか。前節でも述べたとおり、「二種類のつながり」の議論は、歴史的にも論理的にも無理のある議論となっではないだろうか。

一方、日本のゲイ男性において、「特権的な他者とのつながり」が安定するのが難しいのは、同性間において婚姻関係が制度として認められていないからではないだろうかと思像する人もいよう¹¹。つまり、ゲイ男性に

おける「特権的な他者とのつながり」の不安定さを、制度の問題として見ようとする立場である。森山自身も、同性婚をめぐる制度について繰り返し指摘してはいる(森山 2012, 56, 75-77)。事実、もし仮に日本において同性婚が認められれば、「特権的な他者とのつながり」は制度によって縛られるものの安定する可能性が出てくる。しかしながら、同性間の婚姻関係は現在の時点で日本では認められていないため任意のものであり、その関係は異性愛と比較すると自由だと言えるだろう。しかしこの自由は、別の見方をすれば「特権的な他者とのつながり」を不安定にしているとも言える。

ルーマンの「全体社会」と「圏」をめぐる議論が、日本の文脈といかに関連しているのかを明らかにする必要もあるが、異性愛と同性愛の関係を理解するにあたり、同性愛における「特権的な他者とのつながり」は、男性同性愛者同士の「総体的なつながり」に位置付けられないというよりもむしろ、異性愛を含むすべての「全体社会」の中に制度として位置付けられないと議論する方が、流れとしては自然ではないか(図2)。

図2 異性愛と同性愛の関係(評者の理解)



しかし森山は、「特権的な他者との関係」の不安定さを同性婚の有無という制度の問題としてのみ捉えようとはせず、あえて「愛」のゼマンティック——「愛についてのコミュニケーションを継続的に生起させることで愛を可能にする」(森山 2012, 71)——という、コミュニケーションのために保管されている「総体的なつながり」そのものを通して問題化しようとするのである▶¹²。

特権的な他者とのつながりをめぐるゲイ男性と異性愛者の差異は、単

に制度の有無に回収されてはならない。前節で自発的な服従というパラドックスに対応するゼマンティックこそが重要であるとのべておいたことからわかるとおり、制度の有無は、ゼマンティックをめぐる論理的条件との関連で捉えられなければならない。(森山 2012, 75-76)

森山は、ルーマンによる「全体社会」と「圏」との関係について、異性愛の場合、「圏」(例えば、婚姻関係)が「全体社会」のなかにいかに位置付かが問題となると指摘している(森山 2012, 74)。一方、森山の主張をたどると、同性愛における「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」は、異性愛における「全体社会」と「圏」の相似形となっており、実際そのように議論してもいる(図1)。しかし森山は、異性愛関係においては「圏」が「全体社会」のなかに位置付けられているが、同性愛関係については「特権的な他者とのつながり」が「総体的なつながり」のなかに位置付けられていない、だから不安定なのだという主張を行っている(森山 2012, 79)。だがこの議論は、果たしてどこまで有効なのだろうか。ゲイ男性における「特権的な他者とのつながり」の不安定さを考える上で、「二種類のつながり」の不安定さを考えることが、なぜそれほどまでに重要となるのか、評者はその点がどうしても腑に落ちなかった。この「特権的な他者とのつながり」を考慮する上での「総体的なつながり」の重要性、あるいは「圏」のゼマンティックをめぐる議論の旨味がよく分からない。つまり本書の問題は、議論を証拠づけるような十分な資料が提示されておらず、果たしてすべての読者が納得できるような論理展開になっているのだろうかということに尽きるだろう。

3 「総体的なつながり」と「ゲイコミュニティ」について

本書評の最後の節で述べたいことは、「総体的なつながり」と「ゲイコミュニティ」の関係についてである。「ゲイコミュニティ」という用語は本書のタイトルにも使用されていることから分かるように、本書のキーワードとなっている。この「ゲイコミュニティ」に関しては、評者の研究領域でもあるHIV/AIDSの問題とも絡めながら議論したい。

森山は「ゲイコミュニティ」と「総体的なつながり」の関係について、次のように述べている。

ゲイコミュニティという語はその理想主義的傾向により、ゲイ男性の集合性における個々のゲイ男性の「ついていけなさ」を見えにくくさせ、同時に、主に特権的な他者とのつながりと無関連の総体的なつながりのみを指し示す。(森山 2012, 106)

森山の主張にしたがえば、1920年代に誕生した「総体的なつながり」は、当初「特権的な他者とのつながり」を形成するための条件ともなり得たのだが(森山 2012, 54-55)、現在「総体的なつながり」と「特権的な他者とのつながり」は分離し、その結果どちらかのつながりへの「ついていけなさ」をゲイ男性の多くが感じることとなる(森山 2012, 13)。森山の言うところの「総体的なつながり」は、次第に「特権的な他者とのつながり」とは無関係な、形骸化され理想主義化されて名指される何か——これを「ゲイコミュニティ」と呼んでいる——になった。そしてこの「ゲイコミュニティ」という概念は、現在「特権的な他者とのつながり」を形成するための条件とはなりにくく、ときとして「特権的な他者とのつながり」を排除しさえする可能性を孕んだものとなっている(森山 2012, 50, 103, 234)。

評者は、「ゲイコミュニティ」という概念そのものが理想主義と結びついているという森山の議論に、さして異論はない。しかしながら、「ゲイコミュニティ」への「ついていけなさ」を、単なる理想主義への「ついていけなさ」という視点から分析するのみでは十分ではないとも指摘したい。評者は、HIV/AIDSの中の「ゲイコミュニティ」言説にはゲイ男性の行為を統治しようとする規範的側面が付与されており、その結果そこに「ついていけなさ」をゲイ男性が感じているのではないかという点も指摘しておきたい。この点は、HIV/AIDSの言説の中に登場する「ゲイコミュニティ」言説を分析することによって明らかとなる。

そもそも「ゲイコミュニティ」という言説は、HIV/AIDSをめぐるアクティビズムと密接に結び付きながら(日本のみならず非西欧社会の)ゲイ男性の間で広く流通しはじめた(Parker 1999)。この「ゲイコミュニティ」という用語が日本の同性愛者の中で広く使用されるようになったのは、とりわけ1990年代以降である¹³。評者が確認している範囲で「ゲイコミュニティ」という用語が日本の文書の中で最初に登場するのは、1993年10月に発行されてい

る動くゲイとレズビアン(以下、OCCURとする)の『第9回年間総会議事案集』であるが、この中で、セーファーセックス・キャンペーンを「ゲイ・コミュニティへの還元活動」として位置づける旨、記載されている(動くゲイとレズビアン(会) 1993: 23) ¹⁴。同じ年に、田崎英明編による『エイズなんてこわくない』という本が河出書房新社より出版されているが、その中では、アメリカ合衆国の研究者やエイズ・アクティビストによって書かれた論文が翻訳されており、「ゲイコミュニティ」という用語が登場してくる。1994年には横浜で国際エイズ会議が開催され、「ゲイコミュニティ」という用語はこの会議を契機としながら広く日本にも浸透していった。したがって評者の考えとしては、森山の言う「総体的なつながり」と「ゲイコミュニティ」はたしかに連続している部分もあるが、「ゲイコミュニティ」という用語自体は、HIV/AIDSとの抜き差しならない関係において、強い政治的意味が付与されながら流通したのである。

また、この「ゲイコミュニティ」という用語自体が、ある特定の人々によってのみ使用されている用語であるという点も指摘しておきたい。評者は1990年代の末から、日本のゲイ男性に対するインタビュー調査を行っているが、その際インタビュー協力者に対して、「ゲイコミュニティ」という用語を知っているかと聞くことがある。するとインタビュー協力者は、「ゲイコミュニティ」をHIV/AIDSの予防啓発を行う特定の団体と結び付けて語ることがある。例えば、ゲイバーで働いている「店子」でさえ、「ゲイコミュニティ」をHIV/AIDSの予防啓発団体と思っている場合も多々あるのである。「ゲイコミュニティ」という用語に係るバイアスについても、分析の際には考慮する必要があるだろう。

このように近年の日本におけるHIV/AIDSの言説には「ゲイコミュニティ」という表現が頻繁に出てくるのだが、今回の森山の著書においてHIV/AIDSの話はほとんど出てこない。『「ゲイコミュニティ」の社会学』と題した本書を読んだときに、まず気になった点はここにあった。たしかに森山は、第三章「ゲイコミュニティの思想」の章において、「ゲイコミュニティ」という表現がゲイ雑誌の中でいかに使用されているのかを分析しているが、その分析においても、使用されている資料や時代が限定的である(森山 2012, 91)。

今回森山は、「総体的なつながり」と「ゲイコミュニティ」という用語を使用しているが、「総体的なつながり」は森山が独自に生み出した定義である

一方、「ゲイコミュニティ」は様々な文字媒体の中ですでに実際に使用されている。したがって、実際に使用されている言表のレベルとは異なるレベル——「総体的なつながり」——で議論されていることが、論の展開をより不明瞭にしているとも考えられる。もし仮に、1920年代に森山の言う「総体的なつながり」に相当するような用語が当時使用されているとするなら、その用語にしたがって内容を分析する必要がある。では1920年代に、果たして「総体的なつながり」に相当する用語が存在するのだろうか。この点については、森山をはじめとする日本の男性同性愛について研究する研究者の今後取り組むべき課題となるだろう。

おわりに

本書評では森山の著書における論理展開を批判的に検証したが、その批判が森山の仕事の重要性を減ずるものでは全くない。むしろ日本の男性同性愛をめぐる研究に森山は重要な一石を投じたのだと、本書評を書き終えて評者は改めて確認した。森山の仕事は日本の「ゲイコミュニティ」をめぐる研究の地図を提示したのであり、どこに新たな道が拓けているのかを、その地図を手がかりにしながら私たちはさらに先へと進むことができるようになったのである。

しかし、この難解な本書を読み砕くには多大な労力を要するのも事実である。森山が本書で記述した内容をゲイ男性に説明しようとする際、一体どのように語るのだろうか。本研究が重要であるからこそ、今後、その内容を誰にでも分かるように説明することも、「ゲイコミュニティ」に関わる研究者には必要となることなのではないだろうか。

参考文献

- Laumann, E. et al. 1994. *The social organization of sexuality: Sexual practices in the United States*. Chicago: University of Chicago Press.
- 前川直哉. 2011. 『男の絆——明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房.
- Parker, Richard. 1999. *Beneath the equator: Cultures of desire, male homosexuality, and emerging gay communities in Brazil*. New York: Routledge.

動くゲイとレズビアン研究会. 1993. 『ビジビリティ（可視性）の獲得から生活権の確立へ——アカー第9回年間総会議事案集』動くゲイとレズビアン研究会.

註

- ▶1——（森山 2012, 72-73）。
- ▶2——だが、自らを男性同性愛者だとアイデンティファイする者は、本当に「男性を欲望するのではなく男性同性愛者を欲望する」と言えるのだろうか。異性愛男性に恋愛感情を抱くゲイ男性も、実際にはいるのではないだろうか。
- ▶3——森山の言う「総体的なつながり」は、同性愛者というアイデンティティを保有しているか否かが成立条件となっている。この点についても、以下のような疑問が残る。そもそも男性同士で性的接触をする人々が、必ずしも自らのことを男性同性愛者だと認識していた／いるのだろうかということである。なかには自らを異性愛者だと自認しつつ、男性同性間で性愛関係をもった人もいた／いるのではないだろうか（Laumann et al. 1994）。明治期以降の男性同性間の性愛関係について歴史的に分析している先行研究を見る限り（前川 2011）、男性同性間の関係は必ずしも常に社会に肯定されていた訳ではないが、にもかかわらず常に存在していた。たしかに同性愛者のアイデンティティの形成の起源が1920年代にあったとしても、男性同性間で性行為を行う人が自らを男性同性愛者だと認識していたかどうかは不明である。森山の言うように「総体的なつながり」をアイデンティティ保有の如何に限定してしまうと、議論そのものの範囲を狭めてしまうことにもなりかねない。
- ▶4——もちろん森山は、「総体的なつながり」が「特権的な他者とのつながり」のため「だけ」に存在するのではないとも述べている（森山 2012, 82）。
- ▶5——「圏」のゼマンティックとは、本書で以下のように述べられている。「特権的な他者とのつながりが可能になる、「全体社会」と対比的な「圏」を設定し、「全体社会」と特権的な他者とのつながりのための「圏」の間に安定的な関係を成立させるレトリック、言語実践上の機制を「圏」のゼマンティックと呼ぶことにする。繰り返すが、このゼマンティックこそ、特権的な他者とのつながりを考える際もっとも重要なゼマンティック（の一つ）なのである」（森山 2012, 77）。
- ▶6——逆に言うと、1920年代には「二重のつながりが混合する形で成立して」いた（森山 2012, 41）。
- ▶7——（森山 2012, 81）
- ▶8——例えば、以下を参照。「日本において「恋愛」と「性欲」の結びつきは一九二〇年代にすでに主題化されており、男性同性愛者が一九二〇年代に析出されてきたことを考えれば、男性同性愛者、ゲイ男性の集団はつねに異性愛版の「圏」の設定の仕方を横目にみてきたことになる」（森山

2012, 77)。この記述において、同性愛者が異性愛者の「圏」を参照しつつ、同性愛者独自の「圏」を形成しようとしたと主張していることが伺える。この同性愛者と異性愛者の差異を設定しようとする身振りそのものが、両者を別個のものとして設定しようとしていたと言えるのではないか。

- ▶ 9——（森山 2012, 72-79）
- ▶ 10——例えば、以下も参照。「ゲイ男性のつながりは、特権的な他者とのつながりを上首尾に達成するために、総体的なつながりを設定しその「例外事態」として特権的な他者とのつながりを設定するという「圏」のゼマンティックを成立させなければならない」（森山 2012, 83）。
- ▶ 11——もちろん、同性婚が認められていないことだけが、「特権的な他者とのつながり」の困難さの原因ではない。それは、異性愛関係においても同様である。
- ▶ 12——例えば、以下を参照。「愛の基本的なゼマンティックに関しては、ゲイ男性も異性愛のゼマンティックと同じものにしたがっていると考えられる。すなわち、愛という「感情」に支えられた特異な選択現象、愛自身による愛の正当化による「全体社会」への位置づけ、この位置づけにもとづく矛盾を絶えず喚起させつつ適度に解消する愛についての説明や実践的指針が必要とされている」（森山 2012, 73）。
- ▶ 13——たしかに1980年代にも、一部の同性愛者たちが組織した団体に「コミュニティ」という冠をつけることがあった。その例が、OGC（大阪ゲイ・コミュニティ）という団体である。しかしこの場合、OGCが正式名称であり、組織のメンバーの間では大阪ゲイ・コミュニティではなくOGCと呼ばれていたようである。
- ▶ 14——しかし、OCCURのそれ以前の年度の『総会議事案集』に「ゲイ・コミュニティ」という用語が登場する可能性は十分に考えられるが、評者には1993年以前の『総会議事案集』を手に入れることができなかった。もちろん、「ゲイコミュニティ」という表現がOCCURの文書の中で見られる以前に、一部のゲイ男性の間で使用されていたことは当然考えられる。この点も、今後さらなる調査が必要である。「ゲイコミュニティ」という表現はたしかに1993年に記録が残っているが、「ゲイカルチャー」、「ゲイライフ」、「ゲイシーン」などという表現は、「ゲイコミュニティ」という表現が登場する以前からアクティビストの間で広く使用されていた。

Katsuhiko Sukanuma (著)

*Contact Moments: The Politics of Intercultural Desire
in Japanese Male-Queer Cultures* (Hong Kong University Press, 2012年)



キース・ヴィンセント

菅沼勝彦の *Contact Moments* は、日本におけるクィア男性が戦後から現在まで、グローバル化の中で自分たちのアイデンティティをどのように作り上げてきたかを平明、かつ生き生きと論じた待望の一冊である。本書は日本に於けるクィア文化論を歪ませる傾向のあるオリエンタリズムや現地主義への重要な批判も提起しているのだが、その批判は、日本のクィア男性の文化やアイデンティティが実際に何であるかを一方的に「伝える」という姿勢に基づいているわけではない。また、「クィア男性文化とアイデンティティ」なるものの歴史的発展を語っているわけでもない。本書の焦点は、どのようにその文化とアイデンティティが断続的に、時には予期出来ぬやり方で、欧米、取りわけアメリカとのクロスカルチャー的な接触の瞬間を通して「発生」したかということに置かれているのである。菅沼は、日本のクィア男性文化を固まった二項対立に根ざしたものとしてではなく、常に他者との対話を通じて再創造されて行く複雑なクロスカルチャー的な言説の場として理解している。したがって、本書において「日本」や「欧米」、そして「クィア」や「ストレート」は存在論的な前提ではなく、個々の主体が多様かつ創造的なやり方で、その位置性を立てるための暫定的なカテゴリーに過ぎないのである。